

源氏物語

夢の浮橋

紫式部

青空文庫

明けくれに昔こひしきころもて生く
 る世もはたゆめのうきはし (晶子)

薫^{かおる}は山の延曆寺^{えんりやくじ}に着いて、常のとおりに経巻と仏像の供養を営んだ。横川^{よかわ}の寺へは翌日行つたのであるが、僧都^{そうず}は大将の親しい来駕^{らいが}を喜んで迎えた。これまでからも祈祷^{きとう}に關した用でつきあつていたのであるが、特に親しいという間柄にはなつていなかつたところが、今度の一品^{いっぽん}の宮^{みや}の御病氣の際に、この僧都が修法を申し上げて著るしい効果を取上げたのを見た時から、大きな尊敬を払うようになって、以前に増した交情を生じたために、重々しい身でわざわざこの山寺へ訪ねて来てくれたとしてあらんかぎりの歡待^{もてなし}をした。ゆるりと落ち着いて話などをしてゐる客に湯漬^{ゆづ}けなどが出された。あたりのやや静かになつたころ、

「小野の辺にお知り合ひの所がありますか」
 と薫は尋ねた。

「そうです。それは古くなつた家なのでございます。私に朽^{くちあま}尼とも申すべき母がおりま

して、京にたいした邸やしきがあるのでありませんから、私が寺にこもっております間は、近くに来ておれば夜中でも暁でも何かの時に私が役だつことになるかと思ひまして小野に住ませてあるのでございます」

「あの辺は近年まで住宅も相応にあつたそうですが、このごろは家が少なくなつたそうですね」

と言つたあとで、薫は座を進めて低い声になり、

「確かなこととも思われませんし、またあなたへお尋ねしましては、なぜ私がそれを深く知ろうとするのかと不思議にお思ひになるであらうしとはばかりなのですが、その山里のお家うちで私に關係のある人がお世話になつていてということを聞きましたが、事実であるとするば、そうなるまでの経路などもお話し申しておきたいと考えていましたうちに、あなたのお弟子にしていただいて尼の戒を授けられたということが伝わってきましたが、真実でしょうか。まだ年も若くて親などもある人ですから、私の行き届かない所からなくしたように恨まれてもしかたのない人なのですか」

と薫は言つた。僧都は予期のとおりの人はただの家の娘ではなかつた。貴女きしよであろうとは初めから考えられたことであつた。自身で来てこれほどに言つておられる人であれば、

深く愛された人に違いないと思うと、自分は僧であるにせよ、あまりに分別なくあの人の望みにまかせて出家をさせてしまったものであると胸がふさがり、返辞をどうすれば障りなく聞こえるであろうと考えられるのであった。事実をもう皆知っておられるらしい、これだけのことがすでにわかっている上で、探りにかかれては何も何も暴露してしまうはずである、隠してはかえって迷惑が起ころうという結論を僧都は得て、

「どういうことでこんなことが起こりましたかと、昨年来不思議にばかり思われていました方のことかと思われませう」

と言い、

「小野の母と妹の尼が初瀬寺はせに願がございまして参詣さんけいいたしました帰りに宇治の院という所に休んでおりますうちに、母の尼が旅疲れで発病いたしましたして、重そうに見えると申すしらせが私の所へあったものですから、私も宇治へ出かけたのです。そうしますとあちらで不思議なことが起こったと言いだしまして、母の介抱かいほうもさしおきまして、妹の尼はどうしてもこの方の命を助けたいと騒ぎ出しました。その若い病人も死人同様になつていましたますがに呼吸いきはあつたのですから、昔の小説の殯殿ひんでんに置いた死骸しがいが蘇生そせいしたという話を妹は思い出しまして、そんなことかと私の弟子の中の祈祷きとうの上じょうず手な僧を呼び寄

せましてかわるがわる加持をさせなどしておりました。私は、惜しむべき年齢としではないのですが、旅の途中で病みました母に、正念に念仏もさせて終わらせたいと仏のお助けを乞こうておりましてその人のほうはくわしく見ませんでした。何がそうさせていたかと思つてみますと、天狗てんぐ、木精こだまなどというものが欺いて伴つて来たものらしく解釈がされます。助けて京へ伴つて来ましたあとも三月くらいは死んだ人と変わらぬようだったのですが、以前の衛門督えもんのかみの妻でございました私の妹の尼は、一人より持つておりませんでした女の子をなくしましてから時はたつても、悲しみに沈んでおりましたのが、同じほどの年とし恰好かっこうではありまして、非常に美しい人でもある人を拾うことのできましたのは、観音が自分へ下すつたのだと言つて喜びまして、気も狂わんばかりに私へこの人の命を救えと頼むものですから、私も坂さかもと本へ下つてまいり、その時は私自身で祈禱をし、護身法も行なつてあげました。それから失心状態でも放心状態でもなくなり、次第によろしくなられたのでございますが、自身ではまだ憑かれたものの離れてしまわない気がする、これに妨げられずに未来の世界を思うようになりたいと私へ悲しいお話があつたものですから、出家は自分のほうからお勧めもしたくないことであるからと申して授戒を行なわせてさしあげたのでございます。あなたに御関係のある方などは、空では悟りようもありませんでした。不

思議な出来事なのですから、人にも話せば捜しておいになる方の注意を引くことになったかもしれないのですが、世間に聞こえては煩わしいことになるであろうと申して、妹の尼はそれをとめましたので、長く秘密にいたしてまいったのでございます」

こう物語った。いよいよ事実であったのかと薫は、小宰相から少し聞いた話から山へまで遠く僧都を尋ねて来たのではあるが、全然死んだと思っていた人が、確かにこの世に存在していたのかという驚きをまたも覚えて、夢の中の気持ちだし、心の打たれたことよって涙ぐまれるのを、高僧を前に置いてこんな弱さを見せるものでないと反省され、冷静なふうを作っていたが僧都には、薫の感じていることがわかり、これほどにも愛していた人を、生きていても死んだのと同じような尼の身に自分はしてしまったと過失をした気になり、罪を作ったという自責も覚えて、

「悪いものに魅^み入^いられになったということも前生の約束事なのですよ。必ず高い家の子でおありになったのでしょうか。前生のどんなあやまちでさすらいの身などにおなりになったのでしょうか」

と僧都は問うてみた。

「王族の端とまあいうほどの人です。私も妻として結婚をしたわけではありません。あるこ

とが動機になつて恋愛がそこへまで進んでしまつた間柄でした。がしかし、そんなにまで人の好意にすがつて養われねばならぬような待遇を私はしていたのではありませんのに、不思議に跡かたもなくなつてしまつたものですから、身を投げたかなど、それによつてまたいろいろな想像もしていたわけです。罪の軽くなる御処置をお取りくだすつたのですから、安心のできたことと私は思うのですが、母親である人が非常に恋しがり悲しがつておりますから、それだけには知らせてもやりたく思いますものの、その結果長く隠しておいになりました尼様の御本意に違い、断ち切れぬ親子の情で訪ねて行つたりすることになるかもしれぬと思われます」

などと薰は言つたあとで、

「御迷惑なことと思ひますが、その坂本までいつしよにお下りくださいませんでしうか。細かい事実を承ることができましたあとで、なおそのまま捨てておいてよい人では初めからなかつたのですから、夢のようなことを、この話を承つた時を機としても話し合いたいと私は思うのです」

こう言う様子に、その人を深く思うことのがわかれるため、出家遁世とんせいの姿になり、髪ひげも剃そつた僧たちでさえ恋愛の心のおさえられぬ者があるのである、まして女という

ものに戒行が保てるものかどうかあぶないものである、かえって罪に墮おとすことに自分は携おとわってしまつたと僧都は煩悶はんもんした。そして、

「下山しますことは今日明日さしつかえます。日が変わりましたらまいりまして、あちらからお手紙をお差し上げになるように計らいましょう」

こう答えた。薫はたよらない気もするのであつたが、ぜひなどとしていることは、にわかにあせりだしたことに見られて恥はずかしいと思ひ、それではと言つて帰ろうとした。姫君の異父弟は供の中にいた。他の兄弟よりも美しいその子を大将は近くへ呼んで、

「これがその人と近い身内の者です。この少年をせめて使いに出しましょう、短いお手紙を一つお書きください。私とは初めからお言いにならずに、だれか尋ね求めている人があるといふことをお書きください」

と薫が言うと、

「そのお手引きをいたすことで私は必ず罪に墮おとちましよう。事實は申し上げたとおりです。もうあなたが今すぐお寄りになつて、お話しになることをお話しになる、それは何の罪にもあなたのおなりになることではありません」

僧都はこう言うのであつた。薫は笑つて、

「あなたの罪になるようなお手引きを願ったと取っておいでのなるのは誤解ですよ。私は今日まで俗の姿でありますだけでも怪しいほど信仰を深く持つ男です。少年の時代から遁世の志を持つているのですが、三条の宮様がお一人きりで、私のような者一人をたよりに思召すのが断ち切れぬ絆きずなになりました、そのまま今も世に交わっておりますうちに自然に位などというものも高くなり、自身の意志になつた生活もできないことになりました、心は仏の道に傾きながら、行為は罪になるほうへ引かれても行っておりましたが、それは公私のやむをえぬことに生じた枝葉ともいうべきことです。そのほかではこれは仏の戒めであると教えられましたことは、いささかのこともそれに触れたくないと心がけ、慎んでいまして、心の中は僧に変わりはないと信じる私です。ましてそれは不善のはなはだしいものですから、どうして道にはいった人を誘惑したりすることをしまししょう。お信じください。ただ逢いまして気の毒な母親の話などをよくしてやりますことができれば私の心が楽になることと思うからです」

と、昔から仏の教えを奉じることの深さを薰かおるは告げた。僧都そうずも道理であるとうなずき、尊い心がけであることをほめなどするうちに日も暮れたため、中宿りに小野へ寄ることはふさわしい道順であると薰は思ったが、突然に行くのはやはりよろしくなからうと考え、

帰ることにきめた時、この常陸ひたちの子を僧都は愛らしいとほめた。

「この少年に持たせてやります手紙に彼女の昔の知人のことをほのめかしておいてください」

と薫が言ったので、僧都はさっそく手紙を書いた。

「ときどきは山へも登って来て遊んで行きなさい。私にあなたは縁がないのでもないからね」

などとも言った。少年は縁のあるという理由がわからないのであるが、手紙を受け取ってすぐに供の中へまじった。

坂本へ近くなつた所で、

「前駆の者は列を分かれ分かれにして声も低くして行くように」と大将は注意した。

小野では深く繁しげつた夏山に向かい、流れの螢ほたるだけを昔に似たものと慰なぐさめに見ている浮うき舟ねの姫君であつたが、軒の間から見える山の傾斜の道をたくさんたいまつの炬火たいまつが続いておりて来るのを見るために尼たちは縁の端へ出ていた。

「どなたがお通りになるのでしょうか。前駆の人がたくさんなように見えますね。昼間横川よかわ

の方へ海布めの引乾ひきほしを差し上げた時に、大将さんがおいでになって、にわかきようおうに饗きよう応おうの仕度したくをしている時で、いいおりだったというお返事がありましたよ」

「大将さんというのは今の女二にょにの宮みやのたしか御良人ごりょうじんでいらつしやる方ですわね」
などと言っているのも、世間に通じない田舎いなかめいたことであつた。

あの人たちが言うように実際大将が通るのであるうかと浮舟が思っている時に、かつてこれに似た山路やまみちを薫の通つて来たころ、特色のある声を出した随身の声が他の声にまじつて聞こえてきた。月日が過ぎれば過ぎるほど昔を恋しく思つたりすることは何にもならぬむだなことであると情けなく姫君は思い、阿弥陀仏あみだぶつを讃さん仰ごうすることに紛らせ、平生よりも物数を言わずにいた。

薫は常陸の子を帰途にすぐ小野の家へやろうと思つたのであるが、従えている人の多いために避けて邸やしきへ帰り、翌朝になつてから僧都の手紙を持たせてやることにして、きわめて親しく思う人で、おおぎようにならぬもの二、三人だけを付け、昔も宇治の使いをよくさせた随身も添えてやるのであつた。聞く人のない時に、その子を薫はそばへ呼んで、

「おまえの亡くなつた姉様の顔は覚えているか、もう死んだ人だとあきらめていたのだが、確かに生きていられるのだよ。ほかの人たちには知らしたくないと思つているのだから、

おまえが行つて逢つて来るがいい。母にはまだ今のうちは言わないほうがいい。驚いて大騒ぎをするだろうから、そんなことはかえつて知らない人にまでいろいろなことを知らせてしまうことになるよ。母の悲しみを思つて私はあの人を捜し出すのにこんな骨を折つているのだ。ある時までには口外するな」

といましめるのを聞いて、子供心にも、兄弟は多いが上の姫君の美に及ぶ人はだれもないと思ひ込んでいたところが、死んでしまったと聞き非常に悲しいことであるといつても思つているのに、こんなうれしい話を知つたのであるから感激して涙もこぼれてくるのを、恥ずかしいと思ひ、

「はあい」

と荒々しい声を出して紛らした。

小野の家へはまだ早朝に僧都の所から、

昨夜大將のお使いで小君こぎみがおいでになりましたか。お家のことなどくわしいお話を伺つて茫然ぼうぜんとなり、恐縮しておりますと姫君に申し上げます。私自身がまいつて申し上げたいこともたくさんあるのですが、今日明日を過ぎしてから伺います。

こんな手紙が尼君へ来た。驚いて姫君の所へ持つて来て見せるとその人は顔を赤くして、

自分のことが明らかに知れてしまったのであろうか、物隠しをし続けたと尼君に恨まれてもしかたのない義理の立たぬことであると思うと、返辞のしようもなくそのまま黙つていると、

「今でもいいのですから言つてください。恨めしいお心ですね、私に隔てをお持ちになつて」

と恨めしがるのであるが、何がどうであるかの理解はまだできないで、尼君はただわくわくとしているうちに、

「山の僧都のお手紙を持つておいでになつた方があります」

と女房がしらせに來た。怪しく尼君は思うのであるが、今度のものを分明にしてくれる兄の手紙であらう、使いでもあらうと思ひ、

「こちらへ」

と言わせると、きれいなきやしやな姿で美装した童が縁を歩いて來た。円座を出すと、御簾みすの所へ膝ひざをついて、

「こんなふうなお取り扱いは受けないでいいように僧都はおっしゃつたのでした」

その子はこう言つた。尼君が自身で応接に出た。持参された僧都の手紙を受け取つて見

ると、入道の姫君の御方へ、山よりとして署名が正しくしてあった。

まちがいではないかということもできぬ気がして姫君は奥のほうへ引っ込んで、人にも見合わせない。平生も晴れ晴れしくふるまう人ではないが、こんなふうであるために、

「どうしたことでしょう」

などと言い、尼君が僧都の手紙を開いて読むと、

今朝この寺へ右大將殿がおいでになりました、あなたのことをお聞きになりましたため、
初めからのことをくわしく皆お話しいたしました。深い相思の人をお置きになって、いやしい人たちの中にまじり、出家をされましたことは、かえって仏がお責めになるべきことであるのを、お話から承知し、驚いております。しかたのないことです。もとの夫婦の道へお帰りになって、一方が作る愛執の念を晴らさせておあげになり、なお一日の出家の功德は無量とされているのですから、もとに帰られたあとも御仏をおたよりになされるがよろしいと私は申し上げます。いろいろのことはまた自身でまいつて申し上げます。また十分ではなくてもこの小君が今日のことをあなたに通じてくださるかと思えます。

書面を見れば事が明瞭めいりょうになるはずであつても、姫君のほかの人はまだわけがわからぬとばかり思つていた。

「あの小君は何にあたる方ですか、恨めしい方、今になつてもお隠しなさるのね」

と尼君に責められて、少し外のほうを向いて見ると、来た小君は自殺の決心をした夕べにも恋しく思われた弟であつた。同じ家にいたころはまだわんぱくで、両親の愛におごつていて、憎らしいところもあつたが、母が非常に愛して、宇治へもときどきつれて来たので、そのうち少し大きくもなつていて双方で姉弟きょうだいの愛を感じ合うようになつていた子であると思ひ出してさえ夢のようにばかり浮舟には思われた。何よりも母がどうしているかと聞きたく思われるのであつた。他の人々のことは近ごろになつてだれからともなく噂うわさが耳にはいるのであつたが、母の消息はほのかにすらも知ることができなかつたと思うと、弟を見たことといつそう悲しくなり、ほろほろ涙をこぼして姫君は泣いた。小君は美しくして少し似たところもあるように他人の目には思われるのであつたから、

「御姉弟きょうだいなのでしよう。お話ししたく思つていらつしやることもあるでしょうから、座敷の中へお通ししましょう」

と尼君が言う。それには及ばぬ、もう自分は死んだものとだれも思ってしまったのであろうのに、今さら尼という変わった姿になって、身内の者に逢うのは恥ずかしいと浮舟は思い、しばらく黙っていたあとで、

「身の上をくらましておきますために、いろいろなことを言うかとお思になるのが恥ずかしくて、何もこれまでは申されなかったのですよ。想像もできませんような生きた屍しかばねになっておりました私を、御覧になったのはあなたですが、どんなに醜いことだったでしょう。私の無感覚で久しくおりましたうちに精神というものもどうなってしまったのですか、過去のことは自身のことでありながら思い出せないでいますうち、きいのかみ紀伊守とお言いになる人が世間話をしておいでになつたうちに、私の身の上ではないかとほのかに記憶の呼び返されることがございました。それからのちにいろいろと考えてみましても、はかばかしく心によみがえってくる事実はないのですが、私のために一人の親であつた母は今どうしておられるだろうとそればかりは始終思われて恋しくも悲しくもなるのでしたが、今日見ますと、この少年は小さい時に見た顔のように思われまして、それによつて忍びがたい気持ちはいりますが、そんな人たちにも私の生きていることは知られたくないと思えますから、逢わないことにしたいと思います。もし生きておりました

ならば今申しました母にだけは逢いとうございます。僧都様そうずが手紙にお書きになりました人などには断然私はいないことにしてしまいたいと思うのでございます。なんとか上じ手ようすにお言いくだすつて、まちがいだつたというようにおっしゃつて、お隠しくださいませ」

と浮舟の姫君は言つた。

「むずかしいことだと思ひますね。僧都さんの性質は僧というものはそんなものであるという以上に公明正大なのですからね、もう何の虚偽もまじらぬお話をお伝えしてしまひなすつたでしょうよ。隠そうとしましてもほかからずんずん事実が証明されてゆきますよ。それに御身分が並み並みのお姫様ではいらつしやらないのだし」

この尼君から聞き、姫君が女によわう王様であつたということにだれも興奮していて、「ひどく気のお強いことになりましたから」

皆で言い合せて浮舟のいる室へやとの間に几帳きちようを立てて少年を座敷に導いた。この子も姉君は生きているのだと聞かされてきているが、姉弟らしくものを言いかけるのに羞し恥ゆうちも覚えて、

「もう一つ別なお手紙も持つて来ているのですが、僧都のお言葉によつてすべてが明ら

かになっていきますのに、どうしてこんなに白々しくお扱いになりますか」

とだけ伏し目になって言った。

「まあ御覧なさい、かわいらしい方ね」

などと尼君は女房に言い、

「お手紙を御覧になる方はここにいらつしやるとまあ申してよいのですよ。こうしてあつかましく出ていますわれわれはまだ何がどうであつたのかも理解できないであります。だからあなたから私たちに話してください。小さい方をこうしたお使いにお選びになりましたのにはわけもあることでしょう」

と少年に言った。

「知らない者のようにお扱いになる方の所ではお話のしようもありません。お愛しくださらなくなった私からはもう何も申し上げません。ただこのお手紙は人づてでなく差し上げるようにと仰せつけられて来たのですから、ぜひ手ずからお渡しさせてください」

こう小君が言うと、

「もつともじゃありませんか、そんなに意地をかたく張るものではありませんよ。あなたは優しい方なのに、一方では手のつけられぬ方ですね」

と尼君は言い、いろいろに言葉を変えて勧め、几帳のきわへ押し寄せたのを知らず知らずそのままになってすわっている人の様子が、他人でないことは直感されるために、そこへ手紙を差し入れた。

「お返事を早くいただいて帰りたいたいと思います」

うといふうを見せられることが恨めしく、少年は急ぐように言う。尼君は大将の手紙を解いて姫君に見せるのであった。昔のままの手跡で、紙のにおいは並みはずれなまでに高い。ほのかにのぞき見をして風流好きの尼君は美しいものと思った。

尼におなりになったという、なんとも言いようのない、私にとつては罪なお心も、僧都の高潔な心に逢つて、私もお許しする気になって、そのことにはもう触れずに、過去のあの時の悲しみがどんなものであったかということだけでも話し合いたいとあせる心はわれながらもあき足らず見えます。まして他人の目にはどんなふうに映るでしょう。と書きも終わっていないで次の歌がある。

法の師を訪ぬる道をしるべにて思はぬ山にふみまどふかな

この人をお見忘れになったでしようか。私は行くえを失った方の形見にそば近く置いて慰めにながめている少年です。

とも書かれてあつた。こう詳細に知つて書いてある人に存在の紛らしようもない自分ではないか、そうかといつてその人にも、願わぬことにもかかわらず変わった姿を見つけた時の恥ずかしさはどうであろうと浮舟うきふねは煩悶して、もともと弱々しい性質のこの人はなすことも知らないふうになつていた。さすがに泣いてひれ伏したままになつてい

を、
「あまりに並みはずれた御様子ね」

と言ひ、尼君は困つていた。どうお返事を言えばいいのかと責められて、

「今は心がかき乱されています。少し冷静になりましてから返事をいたしましょう。昔のことを思い出しても少しもお話するようなことは見いだせません。ですから落ち着きましたらこのお手紙の心のわかることがあるかもしれせん。今日はこのまま持つてお帰してください。ひよつといたたく人が違つていたりしては片腹痛いではございませんか」
と姫君は言ひ、手紙はひろ拵げたままで尼君のほうへ押しやった。

「それでは困るではありませんか。あまりに失礼な態度をお見せになるのでは、そばにい

る人も申しわけがありません」

多くの言葉でこんなことの言われるのも不快で、顔までも上に着た物の中へ引き入れて浮舟は寝ていた。

主人の尼君は少年の話し相手に出て、

「物もの怪けの仕業しわざでしようね。普通のふうにお見えになる時もなくして始終御病氣続きでね。それで落飾もなすつたのを、御縁のある方が訪ねておいでになった時に、これでは申しわけがないとそばにいて気をもんでおりましたとおりに、大将さんの奥様わでおありになつたのでございますってね。それをはじめて承知いたしましたして、なんともお詫わびのしかたもないように思います。ずっと御気分は晴れ晴れしくないので、思いがけぬ御消息のございましたことでもたまたお心も乱れるのでしよう。平生以上に今日はお気むずかしくなつていらつしやるようですよ」

などと語っていた。山里相応な饗きょう応おうをするのであったが、少年の心は落ち着かぬらしかつた。

「私がお使いに選ばれて来ましたことに対しても何かひと言だけは言ってくださいませんか」

「ほんとうに」

と言い、それを伝えたが、姫君はものも言われぬふうであるのに、尼君は失望して、「ただこんなようにたよらないふうでおいでになったと御報告をなさるほかはありませんまい。はるかに雲が隔てるというほどの山でもないのですから、山風は吹きましてもまた必ずお立ち寄りくださるでしょう」

と小君こぎみに言った。期待もなしに長くどまつていることもよろしくないと思つて少年は去ろうとした。恋しい姿の姉に再会する喜びを心にいだいて来たのであつたから、落胆して大将邸へまいった。

大将は少年の帰りを今か今かと思つて待つていたのであつたが、こうした要領を得ないふうで帰つて来たのに失望し、その人のために持つ悲しみはかえつて深められた気がして、いろいろなことも想像されるのであつた。だれかがひそかに恋人として置いてあるのではあるまいかなどと、あのころ恨めしいあまりに軽蔑けいべつしてもみた人であつたから、その習慣で自身でもよけいなことを思うとまで思われた。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月10日41版発行を使用しました。

入力：上田英代

校正：柳沢成雄

2003年3月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

夢の浮橋

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>